

2015年2月28日

日本スラヴ学研究会 会員各位

春まだ浅いこのごろではございますが、会員の皆様におかれましてはご清栄のこととお喜び申し上げます。

さて、3月に開催される研究発表会（3月20日（金）、於：早稲田大学）のプログラムが決まりましたので、ご連絡申し上げます。ぜひ、ご出席のほどよろしく願いいたします。また関心をお持ちの方にご周知いただければ幸いです。なおプログラムは本会ホームページにもPDFとして掲載しております。

会終了後には、『スラヴ学論集』掲載論文の電子版のホームページでの公開と著作権に関する規定を決めるため、臨時総会を行います。

また会終了後に懇親会を開催する予定ですので、こちらの方にもぜひご出席いただければと思います。

それでは当日、会場でお目にかかれるのを楽しみにしております。

木村護郎クリストフ（事務局）

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1  
上智大学外国語学部 木村研究室内  
日本スラヴ学研究会事務局  
g-kimura@sophia.ac.jp

#### <会費についてのご連絡>

日本スラヴ学研究会の会計年度は毎年4月末日締めとなっております。  
2014年度分まで未払い会費のある方は、4月末日までに口座振替でお早めにお払いください。

**研究会費の振り込み先口座番号が変わりました。振り込みは下記におねがいします。**

**新口座：**

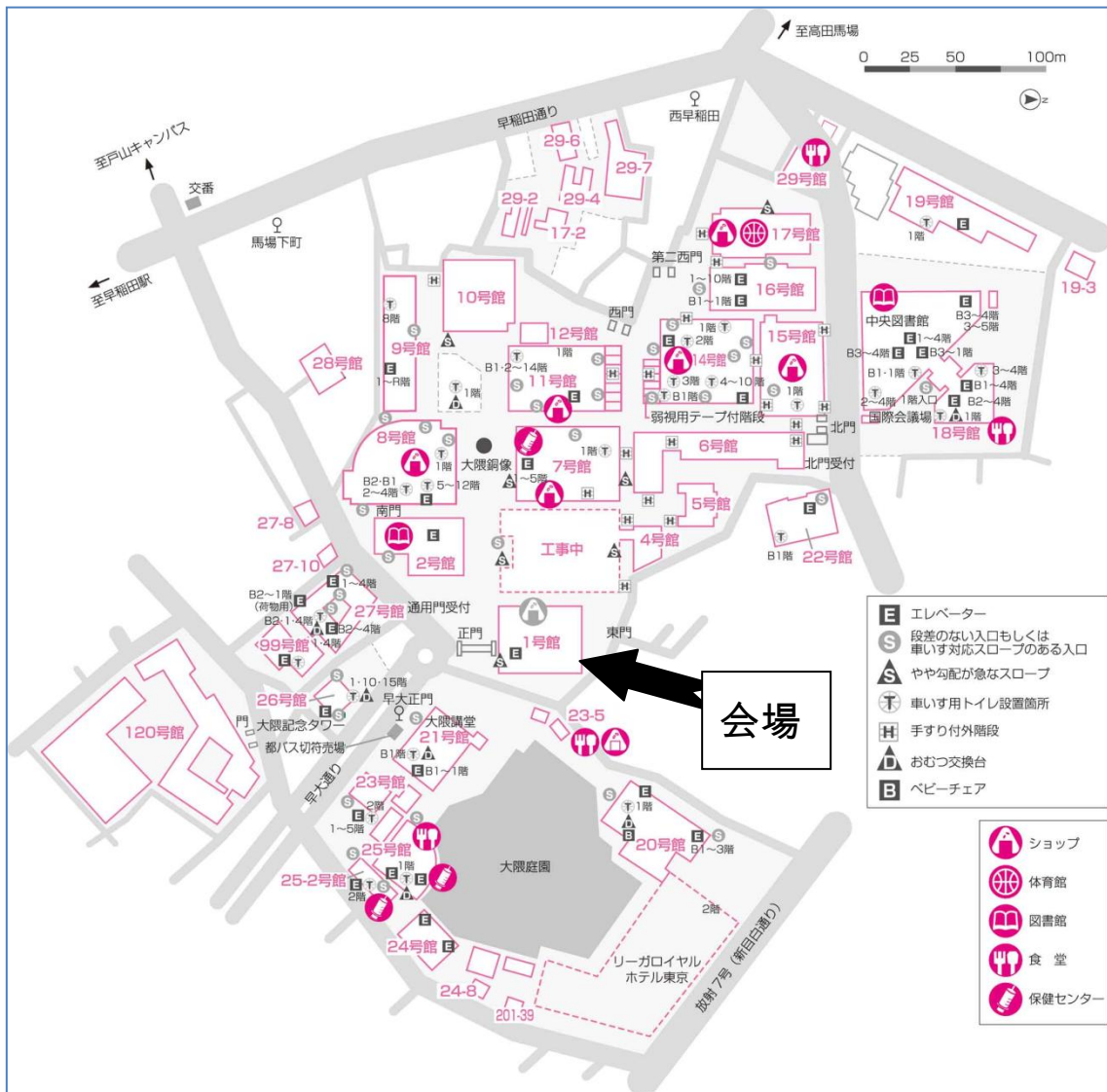
【ゆうちょ銀行 口座記号-口座番号：00860-1-215909、加入者名：日本スラヴ学研究会】  
（※通信欄に、「2014年度会費」等、お書き添えください）。

## 2014 年度日本スラヴ学研究会研究発表会 プログラム

【日時】：2015年3月20日（金）14時30分～18時50分

【会場】：早稲田大学早稲田キャンパス（旧称・本部キャンパス）  
1号館401教室

### 【キャンパスマップ】



(アクセス：東西線 早稲田駅から徒歩5分)

2015年3月20日（金）

（13：00～14：15 企画編集委員会）

14：30～14：35 開会の挨拶： 土谷直人（東海大学、本会会長）

14：35～14：40 研究情報紹介：木村護郎クリストフ（上智大学、本会事務局）  
「学際的ポーランド研究オンライン・プラットフォーム [www.pol-int.org](http://www.pol-int.org)」

14：40～15：15 研究発表Ⅰ [司会：小椋彩（東京大学）]

中野幸男（東京大学）：

「フランスの亡命ポーランド雑誌「Kultura」と Jerzy Giedroyc」

概要：1960年代ロシアの裁判の影で編集者 Jerzy Giedroyc を中心とするパリの亡命ポーランド出版社 Instytut Literacki は亡命出版史に置いて大きな役割を果たしている。Józef Czapski や Gustaw Herling-Grudziński など、ポーランドの戦後史において大きな役割を果たした人間も多い。ロシア語と英語のアーカイブ資料とポーランド語既刊資料を基にその現代的意義を考察する。

15：15～15：50 研究発表Ⅱ [司会：石川達夫（専修大学）]

田中柊子（静岡大学）：

「ミラン・クンデラの小説におけるフランス化」

概要：フランスへの移住はミラン・クンデラの小説に、舞台や登場人物の出身などの地理的設定、ローカルな事柄の選別、チェコ的あるいは中欧的なものの見方や価値観の表現など様々な点にフランス化とも言える変化をもたらした。西側諸国の読者を意識した語りや過去の作品の修正から見えてくる「同化」の表現、フランスで書かれ、フランスを舞台とした物語世界だからこそ顕著に浮かび上がる「異化」の表現の両方に注目し、クンデラの小説のフランス化のプロセスを考察する。

16：00～16：35 研究発表Ⅲ [司会：石川達夫（専修大学）]

宮崎淳史：

「1930年代チェコ・シュルレアリスム美術におけるバタイユの影響  
——インジフ・シュティルスキーの美術作品を中心に」

概要：本報告は、両大戦間期チェコの美術家インジフ・シュティルスキー Jindřich Štyrský (1899 - 1942) による 1930年代前半の絵画作品を対象とし、そこに見られる思想家ジョルジュ・バタイユの影響を検討する。当時のシュティルスキーの作品はシュルレアリスム絵画として高く評価されているが、実は、シュルレアリスムの主導者アンドレ・ブルトンと激し

く対立していたバタイユの影響を多分に受けていた。そこでシュティルスキーの作品を通して、対立的なブルトンとバタイユに通底するものを明らかにし、そこからシュティルスキーの作品の詩学も明らかにする。

16 : 35～17 : 10 研究発表Ⅳ [司会：橋本聡（北海道大学）]

長與進（早稲田大学）：

「1918－1919年のプレシヨウ市における＜東部スロヴァキア文章語＞の使用について」

概要：スロヴァキア文章語史においては、東部地域において「独自の」文章語が用いられたケースがいくつか報告されている。本発表ではそのなかから、20世紀初頭にプレシヨウ市（シャリシ県）で刊行されていた週刊新聞『我らの旗』における使用例と、1919年6月のスロヴァキア評議会（ソビエト）共和国の布告と新聞における「東部スロヴァキア文章語」使用を連続したものと捉えて、選択されたテキストの方言学的な分析を行い、後半で民族名称（エトノニム）に着目して、スロヴィアク／スロヴァーク、チェヒ、マジヤール／ウヘルの用例を検討する。

17 : 15～18 : 45 講演 [司会：野町素己（北海道大学）]

講演者：

Marjan Markovikj (University "Ss. Cyril and Methodius" of Skopje, Faculty of Philology "Blaže Koneski")

マリアン・マルコヴィッチ（スコピエ聖キリル・メトディ大学、ブラジェ・コネスキ記念文学部）

題目：

**\*The Aromanian and its contacts with Macedonian \*\***(from Balkan perspective)\* （使用言語：英語）

\*企画：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

Markovikj氏は、スコピエ大学およびマケドニア科学・芸術アカデミー地域言語研究センターに所属する言語研究者でバルカン言語学の専門家として知られている。とりわけ、マケドニア方言学およびアルーマニア語研究で数多くの業績を挙げており、代表的著作として、両言語の言語接触の諸問題を扱った *Aromanskiot i makedonskiot govor od ohridsko-struškiot region vo balkanski kontekst*(2007)がある。

18 : 45～ 閉会の挨拶：佐藤昭裕（京都大学、本会企画編集委員長）

ひきつづき、臨時総会

（終了後、懇親会）